原　著

特別支援学校生徒に対する「ボランティア体験活動」から見えてきたもの

ー「阿蘇わくわく自然体験塾」における取り組みの意義と課題ー

石山貴章[1)]・八波清彦[2)]

Experience-based volunteer activities for students in special support schools

Takaaki ISHIYAMA & Kiyohiko YATSUNAMI

本研究は，青少年体験活動総合プラン「子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業」に基づく「阿蘇わくわく自然体験塾」における取り組みの実際を，学生ボランティア，引率教員，保護者という３つの位相から分析していくことを通して，本活動のもつ意義と今後の課題について明らかにしていくことを目的とした。今回は，熊本県内の特別支援学校高等部の生徒を対象に活動参加型プログラムが実施され，国立阿蘇青少年交流の家からの支援要請を受けるかたちで，大学生ボランティア19名を派遣し，特別支援学校高等部生徒，学校教員や生徒の保護者と関わりながら体験活動をサポートした。

その結果，本活動の意義として，ボランティア学生の**《生きた学びの体験》《有意義感》**，引率教員の**《体験活動の拡がり》《体験価値》**，保護者の**《子ども再発見》《親子の時間》《感謝》**という認知的枠組みが浮上してきた。これらの声を基にしながら，最終的に，本事業の意義として，**【きっかけ】【つなぎ】【有意義感】【葛藤と昇華】**の５つの項目を確認することができた。

キーワード：ボランティア体験　特別支援学校　つなぎ　質問紙調査　KJ 法

Ⅰ．問題と目的

近年，学生ボランティア活動に対する意義について議論がなされており，キャリア教育やインターンシップ等と関連させながら，その意義や課題が検討されている。政策的なものでは，2002年に文部科学省中央教育審議会が「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申を打ち出し，大学におけるボランティア活動の推進を求めた。2006年には，教育再生会議の最終報告書の中で，ボランティアや奉仕活動を充実し，人，自然，社会，世界と共に生きる心を育てていくことの重要性が明言された。その後も，中央教育審議会答申（2008. 2）や教育振興基本計画（2008. 7）の中で，それぞれ，ボランティア活動の充実化に向けた提言がなされている。また，2008年７月４日には，スポーツ・青少年局少年課が「青少年体験活動総合プラン（拡充）」事業を開始し，これまでの体験活動をより一層，充実させることを目的として，指導者の育成と青少年教育施設の活用について，重点的に取り組むこととした。

一方，上記の諸政策と並行するかたちで，ボランティア活動に関する研究も盛んに行われるようになり，文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2007）が，特別支援教育関係ボランティア活用事例集を作成し，各県の先進的な取り組みを紹介している。

荒川（2006）らは，小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連について検討を行い，小・中・高等学校の学校教育の一環としてなされていたボランティア体験では，「非自発的」なイメージを抱かせる活動が含まれており，大学入学後のボランティア活動へのつながりの弱さについて言及した。これは，「やらされている観」の認識が強く，本来のボランティアの意義でもある「主体性」「奉仕」の認

[1)] 九州ルーテル学院大学　人文学部　心理臨床学科
[2)] 国立阿蘇青少年交流の家　企画指導専門職

識不足により，有意味性の高い活動レベルには至っていないことを指摘している。

また，宮下ら（2008）は，白百合女子大学発達心理学研究室と調布市教育委員会の連携に基づく小学校への学生ボランティア派遣事業の報告をしており，特別支援教育のニーズの高まりに応じたかたちで，発達障害児童への支援の効果と学生自身の学びの過程について言及し，個々の子どもたちに対応できる人材の確保とともに，障害児教育を学ぶ学生に対する専門的力量への期待と互いの学びの相乗性について明らかにしている。ここでは，互いのニーズがマッチングしており，その効果が，実際の現場における子どもたちへの対応に結びつき，まさしく，Win-Win の関係（互いにとってメリットのある活動）が成立していると考えられる。

一方，九州ルーテル学院大学においても，長年，大学としての特色として，ボランティア活動を積極的に推進しており，大学教員や学生自身の高い意識が維持，継続されている。地域においても，ボランティアのルーテルという認識が定着しており，さまざまな領域からのボランティア依頼がなされている。

本研究は，平成22年度，文部科学省，スポーツ・青少年局青少年課による委託事業である，「青少年体験活動総合プラン・子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業」の一環として採択された「阿蘇わくわく体験自然塾」における活動の意義を見出すものである。本活動は，独立行政法人国立青少年教育振興機構阿蘇青少年交流の家を中心にしながら，後援というかたちで，熊本県教育委員会，筆者の所属する九州ルーテル学院大学，熊本大学，県立養護学校等，各関係機関の協力のもとで計画，実施されたものであり，その意義と課題を明らかにしていくことを目的としている。

今回の事業目的としては，特別支援学級及び学校の児童・生徒を対象に，自然体験や社会体験，交流体験を通して社会性を育んでいくことを趣旨としており，平成22年６月～平成23年２月の期間，３回にわたって体験活動が実施された。実際の体験活動参加者は，県立養護学校高等部２年生30名及びその保護者，教員，九州ルーテル学院大学学生19名，熊本大学学生９名，県立高校生徒６名となっている。

また，体験活動が実施されるまでに，事業運営会議をはじめ，学校や大学機関等と打ち合わせ会議を行い，事業プログラム作成にあたって，時間をかけながら計画がなされている。

よって，本研究では，特別支援学校高等部生徒の体験活動を推進していくためのボランティア要請を受けた大学生及び学校教員，保護者に対して実施した活動後の質問紙調査結果，さらに，参加学生に対する事後指導の「語り」から得られたデータに依拠しながら分析を試みる。ここで浮上してきた分析結果に基づきながら，今回のボランティア体験活動を通して，三つの位相が，それぞれに，どのような学びの過程を形成しているのかを明らかにしていくとともに，最終的に，「わくわく自然体験塾」の取り組みの意義と課題について明らかにし，今後の特別支援のあり方とボランティア活動推進のための知見を浮上させていきたいと考えている。

Ⅱ．方　法

１．研究背景

１）青少年体験活動総合プランについて

本事業の背景としては，近年の青少年非行，犯罪等の問題を意識し，社会や自然の中における実体験を基に，善悪の判断等の規範意識や倫理観，社会性や生命への畏敬の念，他者への思いやりといった情操教育を重視しながら，青少年の社会的自立を培うことをねらいとしている。さらに，これらの活動を具現化するためにも，学社連携の中，体験活動プログラムの開発やその指導者養成，体験活動の場の開拓することの必要性が求められている。

２）「阿蘇わくわく自然体験塾」について

以下に，今回実施された体験活動の基本計画について概要を示した。この活動における大きなねらいとしては，自然，社会，交流体験を通しながら，人間的な触れ合いと経験の拡がりが重視されていることが分かる。また，活動のキーワードとして，**【慣れる】【ふれあう】【チャレンジ】**という系統性のある内容設定がなされている。

(1) 趣旨

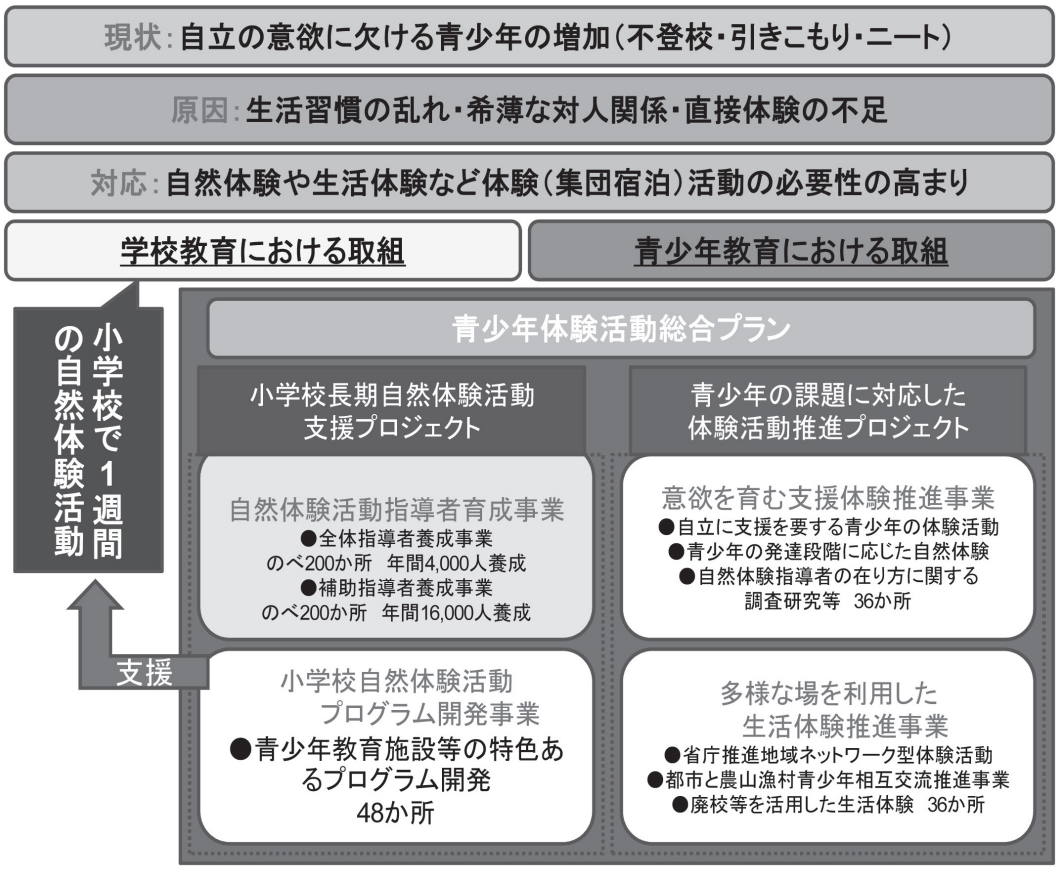

Figure 1　青少年体験活動総合プラン（文部科学省，2008，一部改変）

特別な支援を要する児童・生徒を対象に，阿蘇の大自然の中で自然体験や社会体験，交流体験を通して，豊かな人間性の育成を育む

(2) 活動目標

①自然体験や生活体験を通して，自主的に活動しようとする態度を育てる

②活動や生活の場面において，一人一人が自分の体力に応じた活動を進んで取り組もうとする力を育てる

③仲間やボランティアスタッフと協力して取り組む活動を設定し，思いやりの心を育てる

(3) 企画・実施上の配慮

①自然に親しみ，普段できない体験活動を取り入れ，３回シリーズで行う

②生徒の指導・支援については，担任だけでなく，交流の家の職員，ボランティア等も行う

③各活動生徒１名にボランティア１名がつき，安全管理や精神面・健康面のサポートをする

④自然体験活動については，交流の家職員，ボランティアが指導・支援する

(4) 安全管理

①野外活動においては，事前調査やボランティアスタッフと綿密な打ち合わせを十分に行う等安全管理に努める

②草原等のフィールドを使って行う活動では，活動内容の安全性を検討するとともに，生徒一人一人の体力も考慮しながらコースを変えて行うなどの配慮をする

(5) 配慮事項

３回シリーズで行う中で，２回目は保護者にも参加してもらうことで，親子での交流を深めることを目的とする

２．活動内容

学生ボランティアが参加した活動は，計４回であり，特に，第３回については，親子宿泊体験と

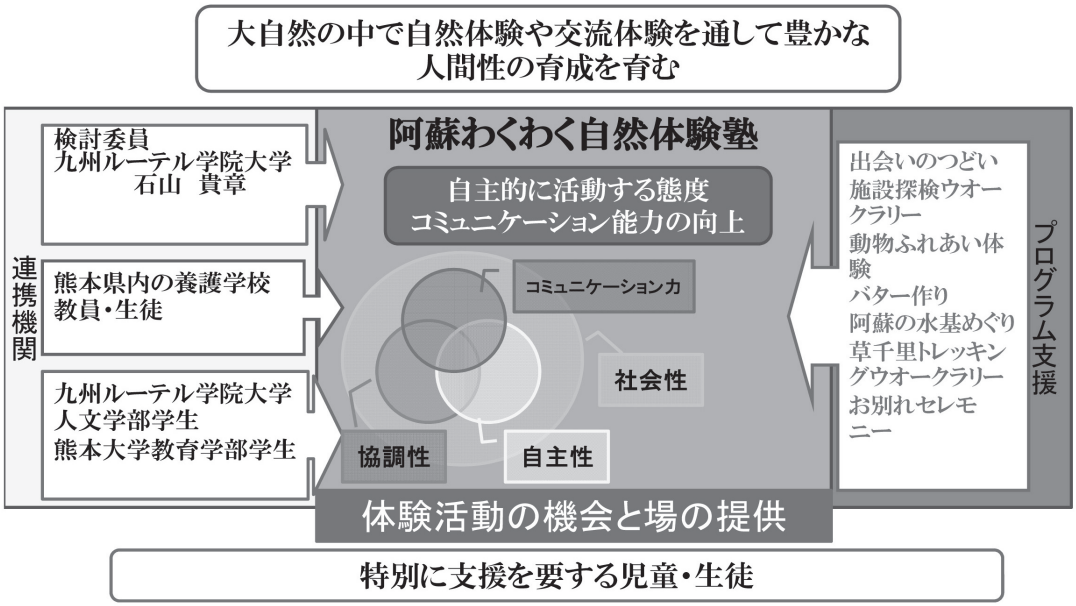

Figure 2　阿蘇わくわく自然体験塾事業概要

Table 1　日程表

第1回（7月）	第2回（8月）	事前研修会（9月）	第3回（9月）1泊2日
開会行事 施設探検ウォークラリー 別れの集い	開会行事 牧場動物ふれあい体験 バター作り 阿蘇水基巡り 別れの集い	施設見学 概要説明 特別支援学校教諭の話 草千里事前踏査	開会行事 草千里ウォークラリー 夕べの集い 修学旅行について 朝の集い 掃除 別れの集い

して設定された。なお，参加学生については，全日程参加の者から１～２回の参加となっている。

３．対象

研究協力者は，今回のボランティア活動に参加した学生のうち，九州ルーテル学院大学の学生19名である。学生の内訳としては，男子学生１名，女子学生18名で，４年生３名，３年生１名，１年生14名である。阿蘇青少年交流の家からの要請を受けた後，大学内にポスターを掲示し，チラシの配布を行った。また，講義の最初に，ボランティア募集のアナウンスを筆者が行った。また，本事業に参加した，引率教員及び保護者の質問紙調査についても併せて分析を行った。

なお，参考として，事前に，ボランティア参加学生の参加動機（聞き取り調査）及びボランティア体験活動の価値（４件法，10のイメージ価値について，全く思わない，思わない，思う，非常に思う）について尋ね，それぞれに１，２，３，４点を与えた。「全く思わない」を１点，「思わない」を２点，「思う」を３点，「非常に思う」を４点とし，自分の価値基準に最も近いものを３つ選択させ，価値の平均値を算出した。

今回，ボランティア活動に参加した動機としては，第一に，自分の経験を深めることや将来，特別支援学校教員を目指しているので，障害のある子どもたちと関わりたい，本プログラム内容の充実性などが多く挙げられていた。また，ボランティア体験活動の価値としては，社会貢献，体験価値，学び，自己満足，思いやりなどの項目が確認できた。ほとんどの学生が，自分自身の将来を見据えての参加であることは意義があると考える。

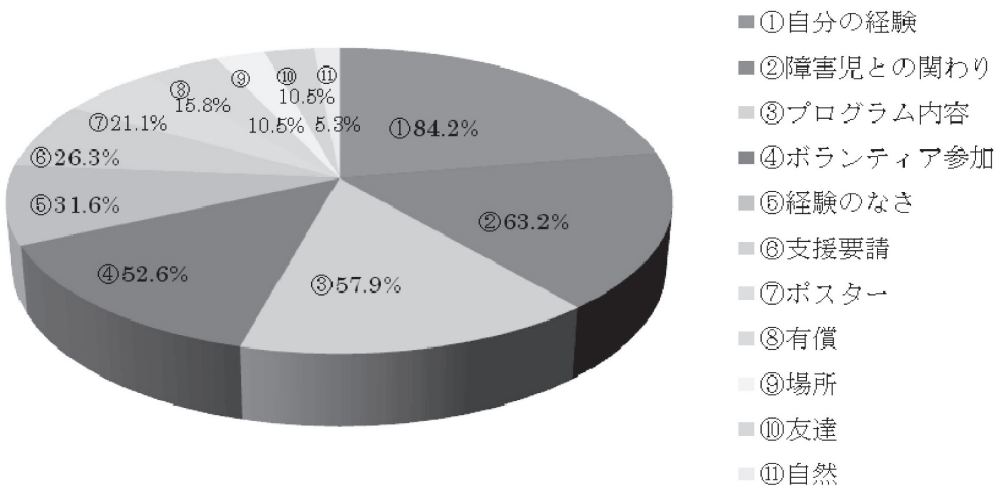

Figure 3　ボランティア活動参加の動機（n=19）

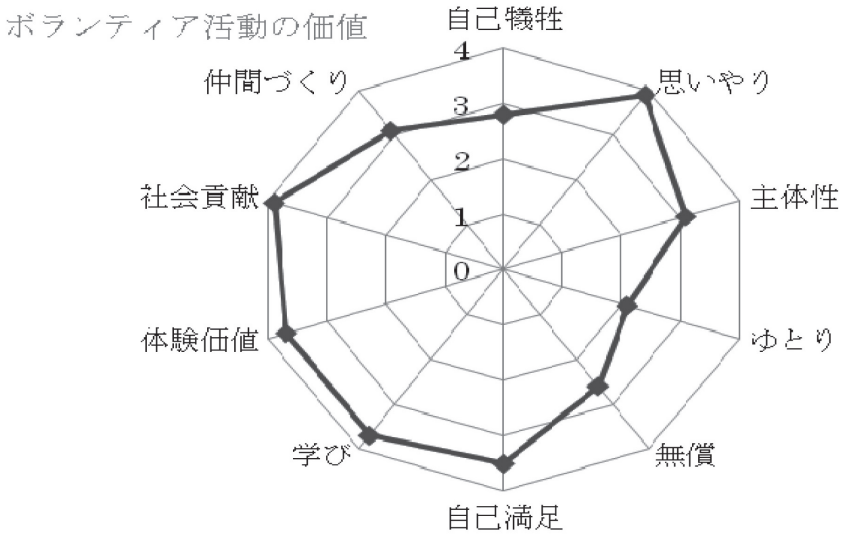

Figure 4　学生がイメージするボランティア体験活動の価値

Ⅲ．結果と考察

結果として，下記にボランティア学生の質問紙調査回答を示した。第３回目の体験活動終了後，各学生に対して質問紙を配布し，後日，回収した。回収率は78.9％である。質問紙の内容は，1）今まで研修補助指導者（ボランティア）として，特別に支援を要する児童・生徒の支援をしたことがありますか，2）次回，このような事業があれば，また参加しますか，3）事業に関して，印象に残った活動は何でしたか（複数回答可），4）生徒と活動する中で，感動したことや発見したことがあれば書いて下さい（自由記述），5）生徒と活動する中で大変だと感じたことは何でしたか（自由記述），6）事業に参加し，支援をする中で，特に気をつけたことがあれば書いて下さい（自由記述），7）今後，特別に支援を要する児童・生徒の事業に参加したときに活動したい（取り入れてほしい）プログラムがあれば書いて下さい（自由記

Table 2　ボランティア参加学生の質問紙調査結果（n=15）

1，今まで研修補助指導者（ボランティア）として，特別に支援を要する児童・生徒の支援をしたことがありますか

①今回が初めて	11名（73.3%）
②今回が２回目	0名（ 0.0%）
③今回が３回目	0名（ 0.0%）
④それ以上	4名（26.7%）

今回のボランティアでは，希望者に１年生が多かったため，経験のない学生がほとんどであった。これに加えて，経験豊かな３，４年生が若干名加わり，ボランティアリーダーとしての役割を依頼した。このボランティアリーダーが，活動の事後報告を行ってくれたおかげで，本ボランティア活動のフォローアップにつながっている。

2．次回，このような事業があれば，また参加しますか

①積極的に参加したい	5名（33.3%）
②機会があれば参加したい	9名（60.0%）
③あまり参加したくない	1名（ 6.7%）
④他の事業に参加したい	0名（ 0.0%）

今回のボランティア活動終了後，また，参加したいという学生が93.3%で，大半を占めた．これは，学生自身の問題意識や関心の高まりと活動に対する充実感，満足感があったためと思われる。あまり参加したくないと回答した学生について後日，理由を尋ねると，「自分が何をしていいのかわからず，困ってしまった」「自分には障害児支援は向いていない」というものであった．本学生については，その後フォローを実施し，再度，ボランティア活動に参加する意思を示してくれた。

3．事業に関して，印象に残った活動（複数可）

①草千里ウォークラリー	11名（73.3%）
②バター作り	5名（33.3%）
③水基巡り	4名（26.7%）
④生徒たちとの食事	3名（20.0%）
④施設探検ウォークラリー	3名（20.0%）
⑥牧場での動物ふれあい体験	1名（ 6.7%）
⑦部屋点検	1名（ 6.7%）
⑧ビデオ鑑賞	1名（ 6.7%）

今回の活動で，印象に残ったものとして，フィールドにおける野外活動が多かった。特に，草千里でのウォークラリーは，生徒と触れ合う時間が多く，大自然の中での伸び伸びとできた活動だったため，学生ボランティアにとっても，有意義な内容であったことが想定された。

4．生徒と活動する中で感動したことや発見したこと（複数可）

①他のボランティアで知り合っていた子どもと再会できたこと
②食事や会話を通して仲良くなれたこと
③生徒たちが何に対しても興味をもち，積極的に活動していたこと
④生徒がボランティアに気を使いながら（だいじょうぶですか等）活動していたこと
⑤バター作りの時，「頑張ろうね」等と声を掛け合いながら協力していたこと
⑥みんながとても素直であったこと
⑦初対面でありながらも，ボランティアを頼りにしてくれたことに感動した
⑧生徒どうしで「ここはこう，これはだめ」等と教え合いながら活動していたこと
⑨「おねえちゃん」と呼んでくれたこと
⑩生徒自らが，ボランティアの学生たちに積極的に関わろうとしてくれていたこと
⑪互いにたくさんの思い出ができたこと

学生ボランティアの感動体験や新たな発見として挙げられたものは，信頼関係の構築や生徒の優しさに触れたこと，互いに協力する場面があったこと，ボランティアを頼りにしてくれたこと，積極的に関わる姿等が挙げられていた。不安もあった本活動の中で，少しずつ，互いの関係が築けたことに対する感動と自分自身に対する「やれるんだ」という自信が生じたものだと考えられる。

５．生徒と活動する中で大変だと感じたこと（複数可）

①一人一人に対する対応の仕方があり，その子にとって，よりよい行動や言葉をかけること
②生徒一人一人の体調管理の的確な把握
③障害に関する知識の不十分さ
④目が行き届かない，離せないところ
⑤予想外の行動をとられた場合の対応
⑥食事や着替え等の支援方法
⑦コミュニケーションややりとりの難しさ
⑧食事の介助
⑨支援者の連携体制をもっととれば，生徒に対して，よりスムーズな行動をとることができた
⑩自分の対応の不甲斐なさ，認識不足
⑪言葉が話せない生徒への対応
⑫生徒が自分一人でどこまでやることができるのかといった実態把握の面
⑬子どもの個性やこだわり行動への対応
⑭生活年齢に応じた接し方の難しさ
⑮保護者と一緒の場合での生徒への対応
⑯生徒に関する最低限知っておく必要性のある情報があれば対応も可能であった場面がある
⑰アレルギーやパニックの要因

学生ボランティアの負担感については，一人ひとりの生徒の実態に応じた関わりのあり方や基本的な障害理解，コミュニケーション等，幅広い内容となっている。事前に，可能な限りの情報提供があれば，学生の負担感が軽減されたであろう内容のものも多く含まれていた。次回は，生徒の基本的な情報提供も必要であろう。

６．事業に参加し，支援をする中で特に気を付けたこと（複数可）

①高校２年生として接していくこと
②否定的な言葉や表現は使わない
③いつも何かを話しかけるよう意識した
④言葉づかい
⑤子どもあつかいをしないよう心がけた
⑥積極的な関与，サポートの姿勢
⑦事故やけがのないよう配慮した
⑧わからないことがあれば，必ず学校の先生方に質問するようにした
⑨参加生徒全員と関わろうとしたこと
⑩目配り，気配り
⑪生徒への呼びかけをたくさん行う
⑫あいさつや返事をしっかりと行う
⑬周りの環境に関する安全面の対策
⑭出来る限り，生徒自身に考えさせて，行動させること
⑮男子生徒との関係
⑯自閉症の生徒に対する配慮（パニック刺激の低減等）

支援をする中で特に配慮した事項としては，言葉かけや関わり方，目配りや安全面への配慮などが挙がった。また，今回の学生ボランティアのほとんどは女性であったため，男子生徒との距離感についても言及がなされていた。事前に，担当教師からのアドバイス等もあり，これが有効となっている。

７．今後，特別に支援を要する児童・生徒の事業に参加したときに，活動したい（取り入れてほしい）プログラム

①一緒に何かを製作する取り組み
②集団ゲーム
③個々の生徒の実態に合った豊富なプログラムの設定
④日頃，なかなか体験できないような活動
⑤親子活動
⑥調理
⑦フィールドワーク
⑧キャンプ
⑨山登り

今回の活動を踏まえた上で，さらに，取り組みたい，取り入れてほしい活動としては，ものづくり体験，集団で実施できる活動，生徒の実態に即した活動等が挙げられた。また，親子活動の意義についても学生自身が気づいたようで，継続して，親子プログラムを実施していくことが望まれよう。

８．今回の事業に参加しての感想

今回の事業への参加を通しての感想については，本活動における全体的な評価や課題をより，明確化できるものであると考えたので，ボランティア学生，引率教員，保護者の３つの位相から，自由記述内容をKJ法によって分析を行うこととした。KJ法とは，川喜多二郎（1967）によって具現化された質的研究アプローチ（野外科学的方法）であり，情報の簡潔な整理の範囲を超えた，人間の主体性と創造性に深く関与する実践的方法である。本研究においては，KJ法の特性を踏まえながら，テクストの文脈を崩さない形でカテゴライズを図った.その後，カテゴライズされた結果について，第２筆者及び本体験活動にすべて参加した学生１名に対して意見を求め，分析結果の精緻化を試みた。最終的には，下記のような収束結果を得ることができた。

１）ボランティア参加学生の受け止め

19名の学生における「今回の事業に参加しての感想」のカテゴライズ作業から，〈貴重な体験と学び〉〈考えるきっかけ〉〈生徒からの示唆〉〈期待と不安〉〈丁寧なやりとり〉〈やりがい〉〈笑顔の語りかけ〉〈サポートのあり方〉〈実践の価値観〉〈積極性〉〈情報把握〉〈ボランティアとは〉〈活用方法〉〈申し訳なさ〉〈経験の有無〉の15のサブカテゴリーが抽出され，これらを，さらに，**【生きた学び】【スムーズな関係】【有意義感】【チャレンジ】【役割意識】【葛藤】**の６つのカテゴリーに収束することができた。

Table 3　ボランティア参加学生の受け止め（n=19）

カテゴリー	サブカテゴリー	テクスト（自由記述内容）
生きた学び	貴重な体験と学び	・宿泊でのボランティアはなかなかできない体験であるのでとても勉強になった ・多くの人たちと関わり，体験を通して非常に勉強になった ・サークル活動では，ダウン症児と関わっているが，今回，他の障害のある生徒とたくさん接することができたことが貴重な体験となった
	考えるきっかけ	・今後の学生生活の学びの中で，どのように支援をしていけばよいのかを考えていくきっかけを作ることができた ・大学の講義で学んだことの実地検証につながった
	生徒からの示唆	・障害があるなしに関わらず，一人の人間として関わることの大切さを感じた ・生徒のひたむきさや努力を目の当たりに感じることができた ・生徒との関係が築かれた瞬間の喜び
スムーズな関係	期待と不安	・先生方や施設の職員の方がとても親切な対応をしてくれたので，安心して活動に参加することができた ・さまざまなことに気を配ることの大変さを実感した

	丁寧なやりとり	・最初はとても不安であったが，先生や施設の方々の丁寧な指導のおかげでずいぶんと助かった ・生徒と仲良くなれるかどうかの不安があったが，積極的に関わって行く中で徐々に解消することができた
有意義感	やりがい	・生徒さんがとても明るく，元気であったのでやりがいがあった
	笑顔の語りかけ	・生徒さんが笑顔で話しかけてくれたことが，活動の有意義さにつながった ・生徒がとても楽しそうに活動してくれたことがよかった
チャレンジ	サポートのあり方	・障害に関して，より深く認識することができた ・サポートのあり方を具体的に体験することができた
	実践の価値観	・肌で感じることのできる実践の価値 ・日々の活動に刺激されることが多かった
	積極性	・何事に対しても，積極的に行動に移していくことの大切さを学んだ ・機会をみつけて，多くのボランティアにチャレンジしていきたい
役割意識	情報把握	・日程の連絡や調整を早く伝えてほしかった ・生徒に関する実態の調査票があればよかった
	ボランティアとは	・ボランティアの必要性について考えさせられた ・ボランティアがいなくても活動できるものがさくさんあった ・ボランティアが入りすぎると，逆に，生徒の活動に対して不必要な制限などがかかるかもしれない ・生徒に実態を考えると，少し物足りないと感じる活動もあった ・活動に関する環境設定の配慮がもっと必要
葛藤	活用方法	・もっとボランティアを積極的に使った方がよい ・仕事の割り振りをもっと徹底するとよいのではないか
	申し訳なさ	・ボランティアの数の割に，十分な働きができないことがあったので申し訳なかった ・ボランティアとして自覚が十分でない学生がいたのではないか ・時間をもてあそんでいる学生の姿もあった ・同じボランティアの立場で，腹立たしい場面もあったのが残念
	経験の有無	・ボランティアの経験の有無が実践現場ではよく出てくる

2）ボランティア引率教員の受け止め

ボランティア引率教員の内，質問紙に回答してくれた10名の教員における「今回の事業に参加しての感想」のカテゴライズ作業から，〈戸惑い〉〈ボランティアの使命〉〈中身の濃い体験〉〈生徒の姿〉〈計画の有効性〉〈プログラムの有意味感〉〈事前準備〉〈危険性〉〈配慮〉〈内容の検討〉の10のサブカテゴリーが抽出され，これらを，さらに，**【距離感】【体験価値】【有意味性】【安全面への対応】【柔軟性】**の５つのカテゴリーに収束することができた．

Table 4　引率教員の受け止め（n=10）

カテゴリー	サブカテゴリー	テクスト（自由記述内容）
距離感	戸惑い	・ボランテイア学生と生徒達との距離感や接し方に戸惑いがあった
	ボランティアの使命	・ボランティア（大学生）が事前にどういう学習をして，本事業の目的を理解しているのか疑問であった ・ボランティアの学生さんにも大変お世話になった ・ボランティアの学生さんがもっと積極的であればよかった ・ボランティアの学生と生徒たちが触れあえたことがよかった
体験価値	中身の濃い体験	・回数を重ねるごとに，お互いにとって，中身の濃い体験学習になった ・限られた条件の下，楽しい活動を体験することができ，生徒も保護者も喜んでいた

	生徒の姿	・生徒たちが見通しをもって取り組むことができていた ・生徒が楽しそうに活動している姿がよく見られた ・生徒たちが落ち着いて活動に参加することができた
	計画の有効性	・年間を通じて，3回も体験できたことがよかった ・さまざまな活動を計画していただきよかったと考える ・修学旅行の事前学習にもなって有益であった ・生徒たちも活動に慣れ，「阿蘇」と言えば，「青少年の家」というふうになった
有意味性	プログラムの有意味感	・今後も，ぜひ，継続したプログラムを計画していただければ助かります ・打ち合わせ回数を今回以上にやっていくと，よりよいものになると思う
	事前準備	・職員の方々には，気配りや活動の準備等をしてもらい助かった
安全面への対応	危険性	・怪我があったため，今後は，十分に部屋等の危険と思われる箇所に気をつけたい
	配慮	・安全面に格段の配慮をいただき感謝
柔軟性	内容の検討	・障害の軽い生徒と重い生徒が一緒に活動するので，内容をしっかりと検討していかなくてはならない
	臨機応変	・事前の打ち合わせと違うこともあるので，臨機応変な対応が必要だと感じた

3）保護者の受け止め

本事業に参加した保護者の内，質問紙に回答してくれた14名の保護者における「今回の事業に参加しての感想」のカテゴライズ作業から，〈興味・関心の高まり〉〈試み〉〈積極性〉〈伝えあい〉〈わが子の課題〉〈地域資源〉〈いつの間に〉〈共に活動〉〈対話〉〈踏み込み〉〈貴重な時間〉〈つながり〉〈見守り〉〈スムーズ〉の14のサブカテゴリーが抽出され，これらを，さらに，**【達成感】【チャレンジ性】【自己表現】【再発見】【見えた成長】【交わり】【親子】【感謝】**の７つのカテゴリーに収束することができた。

Table 3　ボランティア参加学生の受け止め（n=19）

カテゴリー	サブカテゴリー	テクスト（自由記述内容）
達成感	興味・関心の高まり	・バターを作ることを通して自信につながった ・達成感のある活動がよく設定されていた
	充実	・興味・関心を高めてくれるような活動内容 ・ゴールの喜びが感じられる活動
チャレンジ性	試み	・友達が牛に触っているのを見て，自分も牛を触ろうとしていた ・苦手な動物に対して，積極的に関わる姿
	積極性	・ビンゴゲームやウォークラリーをこんなに最後まで集中して楽しむとは驚きでした ・積極的に参加し，多くの人と話したり，関わったりすることができていたこと
自己表現	伝えあい	・いつもとは違った体験や感覚を通して楽しみを伝えるような様子が見られた
	表出	・動物に触れあったり，湧水を飲んだりする体験を通して自分の思いを言葉（気持ちいい等）で表現することができた
再発見	わが子の課題	・生き物があまり好きではないことが分かった ・集団行動がまだできていないことが分かった ・他者の話を聞くことに課題があることを知った
	地域資源	・阿蘇地域に知らなかった場所や資源がたくさんあった ・また，新たな体験ができる機会を得たい ・牛乳のおいしさに親子で感動

見えた成長	いつの間に	・小さい頃は苦手だったこと（集団活動の中で「待つ」,「音が苦手」「知らない人が多いことに対する不安」）等がずいぶんと平気になっていたこと ・水が冷たく，最初は手洗いが嫌だったみたいでしたが，阿蘇では自分から手をだすことができていた
	共に活動	・親子で一緒に活動をすることで，わが子の成長をより具体的に知ることができた
交わり	対話	・いつもできないことが，ボランティアの学生さんと一緒であれば，話したり，活動できていたことに驚き ・ボランティアの学生さんにいろいろと話を聞いてもらえたことで，とても嬉しかった様子
	踏み込み	・ボランティア学生がもう一歩踏み込んで関わってくれたら ・新しい人たちとの交流経験
親子	貴重な時間	・親子で触れ合う時間 ・気持ちのゆとり ・緩やかなスケジュール
	つながり	・保護者間のつながりを感じた ・子どもと共に出かけることが少なかったので，心強かった ・子どもとの楽しい思い出ができた ・出会い
感謝	見守り	・本来，社会でもこういうかたちの取り組みが必要 ・スタッフ，ボランティアにお礼を申し上げたい
	スムーズ	・ぜひ，また利用させて下さい ・運営がスムーズであったため，動きやすかった

3．生徒の変容について

次に , 今回参加したボランティア学生及び引率教員 , 保護者の質問紙調査項目の３「体験を通して生徒たちの様子など変化や気づいた点があればお書きください」の結果を下記に示す . それぞれの位相から , 今回の活動を通して確認された生徒の変容に対する気づきが記述されている .

Table 6　ボランティア学生が見た生徒の変容に対する気づき

(1) コミュニケーションを積極的に取ろうとする生徒が増えた
(2) ボランティアに逆にいろいろなことを教えることによる自信
(3) 仲間意識
(4) お互いが助け合う気持ち
(5) 新しい経験に対するチャレンジ精神
(6) 表情やしぐさの変化
(7) 対話場面が多くなった
(8) 活動に対する見通しがついてきていた
(9) 協力する場面
(10) 生活のたくましさ
(11) 問題解決力
(12) 優しく接してくれる

Table 7　教員が見出した生徒の変容に対する気づき

(1) 体験に慣れるにつれ , 生徒自らが見通しをもって活動することができだした
(2) 人や環境に対しての柔軟な姿勢
(3) 笑顔で過ごす場面の増加
(4) 他者に対する気遣いの気持ち
(5) ボランティア学生や仲間に対する優しさ
(6) 異年齢集団（年上）の方たちへの関わり方
(7) ボランティア学生との触れあう時間を大切にしていた

(8) 人見知りする生徒も，ごく自然に接する場面が出てきていた
(9) バター作り活動など，普段できない活動に対して，興味・関心を強く示していた
(10) さまざまな活動内容に対するわくわく感をもてるようになった
(11) 生徒同士の距離が近くなった（クラスを超えて）
(12) 施設の方やボランティアの学生たちとの関わりが濃くなった
(13) 普段とは異なった環境下での活動力の高まり
(14) 積極性や主体性が強く感じられるようになってきた

Table 8　保護者が見出した生徒の変容に対する気づき

(1) バターを作ることを通して自信につながっていた
(2) 達成感のある活動に満足げであった
(3) 興味・関心の高まりが表情によく出ていた
(4) 友達が牛に触っているのを見て，自分も牛を触ろうとしていた
(5) 苦手な動物に対して，積極的に関わる姿
(6) ビンゴゲームやウォークラリーをこんなに最後まで集中して楽しむとは驚き
(7) 積極的に参加し，多くの人と話したり，関わったりすることができていた
(8) いつもとは違った体験や感覚を通して楽しむ様子が見られた
(9) 動物に触れあったり，湧水を飲んだりする体験を通して自分の思いを言葉（気持ちいい等）で伝えることができた
(10) 小さい頃は苦手だったこと（集団活動の中で「待つ」,「音が苦手」「知らない人が多いことに対する不安」）等がずいぶんと平気になっていたこと
(11) 水が冷たく，最初は手洗いが嫌だったみたいでしたが，阿蘇では自分から手をだすことができていた
(12) いつもできないことが，ボランティアの学生さんと一緒であればできていたことに驚き
(13) ボランティアの学生さんにいろいろと話を聞いてもらえたことで，とても嬉しかった様子

学生ボランティアは，生徒たちの変容について，**【慣れ】【積極性】【関わり】【自信】【協力】【思いやり】**に関連する内容を挙げており，引率教員は，**【体験知】【柔軟性】【気遣い】【興味・関心】【距離感】【関与濃度】**，保護者は**【達成感】【チャレンジ性】【感情表現】【成長の気づき】**に関連したものを中心に挙げていた。以下に，本結果を基にした，今回の活動における生徒の変容要因から浮上してきた本事業の意義について図示しておく。

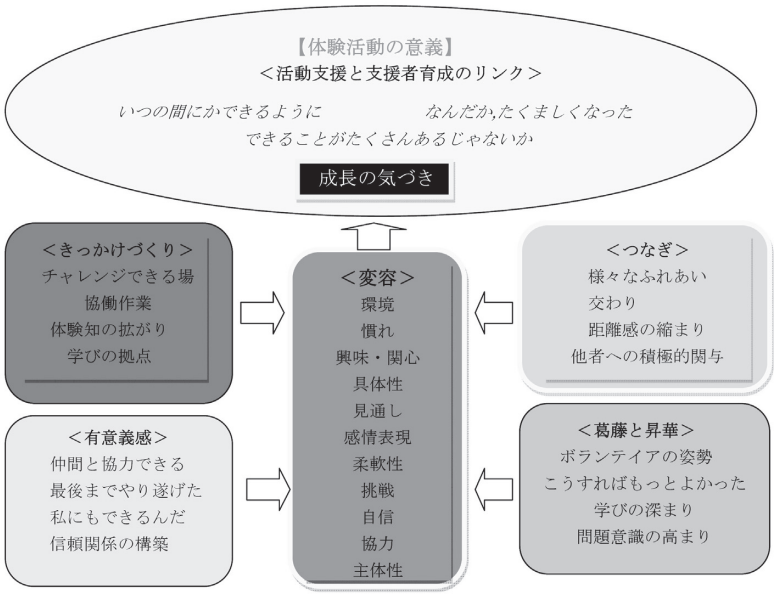

Figure 5　生徒の変容要因から浮上した体験活動の意義（図）

述），8）今回の事業に参加しての感想を書いて下さいの８項目となっている。

今回の体験活動を通して確認することができた生徒の変容に関わる大きな要因として，**＜きっかけ＞＜つなぎ＞＜有意義感＞＜葛藤と昇華＞**が浮上してきた。普段，なかなか体験することができないことに対してチャレンジする環境と**＜きっかけ＞**が与えられ，ボランティア学生をはじめ，青少年交流の家職員，教員，保護者などと直接交わること通しながら，他者への関与力が緩やかに形成され，互いの**＜つなぎ＞**が紡ぎだされてくる。さらに，一つ一つの活動を自分のものとして吸収することにより**＜有意義感＞**生みだされている。一方，対極的なものとして，支援者側の**＜葛藤と昇華＞**が存在したが，特に，ボランティアとして参加していた学生自らが，自身の内面に絶えず問いかけながら，より意味のある活動形成を行っていた点で，最終的には，このような姿勢や対応が生徒自身の力の獲得にもつながっていると考えられる。

Ⅳ．総合考察

本研究の目的は，子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業「阿蘇わくわく自然体験塾」における取り組みについて，その意義と構造を明らかにしていくために，質問紙調査及び分析手法としてKJ法を用いて検討を行ってきた。

今回の活動を通して，まず，生徒の興味・関心がどのようであったかを検討すると，野外活動や自然体験の場面に高い評価が得られていた。特に，草花や動物と直接触れ合ったり，観察したりする経験やゲーム的な要素をふんだんに盛り込んだ活動については，生徒たちの評価も良かったようである。また，何かを“探す”，“作る”といった活動は，生徒自身の好奇心を揺さぶると同時に，他者と協力して最後までやり通すといった充実感や満足感の得られやすい活動内容となっていたように思われる。

やはり，日常的に体験できない内容のものは，生徒たち自身の新たな自己理解，他者理解にもつながり，生活力の枠組みを拡げていくためにも必要な活動だと考えられた。

今後の課題としては，活動内容のさらなる精選や対象児のニーズに即したプログラムの設定が挙げられる。そして，ボランテイアを派遣する側としては，参加学生に対して，障害に関する基本的知識や技能の習得に向けた事前指導及び事後指導を実施していくことである。今回の取り組みの中で浮上した，ボランティア学生に対する評価と課題を検証し，次の活動に向けた支援体制を整えていくことが課題となろう。

以下，本事業の意義について，ボランティア養成，生徒の変容，体験活動の意義の３つの視点から考察を行う。

１．ボランティア養成

本事業の目的のひとつに，ボランティアの養成がある。今回は，大学生及び高校生のボランティアを中心として組織され，その運営に携わった。計３回の活動において，全日程を通じて参加できた学生は少ないものの，自らボランティアに参加意欲を示し，生徒と共に活動できた体験には価値があった。その根拠として，学生自身，ボランティア活動後，筆者の研究室を訪れ，体験で得られた学びや自分の課題等について報告してくれたり，他のボランティアにも積極的に参加する者も増えた。

一方，課題として，質問紙調査の回答にもあったように，ボランテイィアに対する心構えや事前指導が十分できなかったため，実際の現場での対応や支援のあり方，取り組む姿勢等で指摘を受けることもあった。また，大学の講義や他の行事等と重なり，ボランティア学生のほとんどが，まだ，入学してきたばかりの１年生だったことにより，十分な自覚がないままの参加であったことも否めない。ただし，本体験活動への参加をきっかけとして，障害児者問題やボランティア活動に対する認識が高まった学生も数多くおり，今後，体験を重ねながら，理論と実践の融合を図ってくれることが期待される。

２．生徒の変容

今回の活動に参加した学生，教員，保護者による生徒の変容結果から，いくつかの変容過程が示された。それぞれの立ち位置からの見方，解釈のあり方があるが，総体的に，生徒のプラスの要素

が数多く提示されたと言えよう。

体験活動を通して確認された共通項としては，生徒たちの「主体性」や他者への「関与力」，「チャレンジ」精神，「優しさ」，「気遣い」，「心配り」などがあった。また，「いつの間にかできるようになっている」という成長の喜びが再確認できた点においても，親子プログラムの有意味性が理解できよう。プログラム自体が，実際の体験を重視し，その体験を遂行するためには，互いの協力場面が不可欠となっていたことが，上記のような効果を生みだすことにつながったと想定される。

３．体験活動の意義

本事業全体に関する満足度には一定の評価が示された。特に，参加した多くの生徒達が，「楽しかった」「またやってみたい」「仲良くなることができた」等の感想をもっていたことから，３回の体験活動を通して，「慣れる」「ふれあう」「チャレンジする」の3段階による系統的な体験活動プログラムが充実したものとなっていたと考えられる。

また，引率教員や学生ボランティア，保護者からも，「生徒にとって意義のある体験であった」「今後もこのような活動をぜひ，計画してほしい」「子どもの新たな力を発見した」等の回答から，意義ある活動であったと考えられる。何よりも，本活動は，学びの「きっかけ」づくりに寄与し，施設のもつソフト，ハード面の財産をふんだんに開放，提供することによって，地域における「学びの拠点」のひとつとなり，その存在価値を示すとともに，互いを「つなぐ」ことを通して，若者支援と支援者養成という大きな目的を達成したものとして捉えることができよう。

一方，課題としては，大学側の責務として，ボランティア学生の意識づけを図りながら，支援の姿勢やあり方，障害に関する知識や生徒の心理的側面における認識等を養っていく必要性があると考えられる。また，打ち合わせのさらなる徹底化を図るとともに，参加機関が連携を取り合いながら，より綿密な打ち合わせを行い，よりよいプログラムの形成に向けた努力が必要となってこよう。荒川（2006）らは，大学生を対象に，ボランティア活動のイメージに関する調査を行い，「無償性」「社会貢献」「思いやり」「自発性」「責任感」「助け合い」などの項目に対して，高いイメージが保たれていることを明らかにしている。今回の実践活動を分析していくことを通して，上記に挙げた項目はすべて該当するものであることが実証されたが，引き続き，これらのイメージを再確認していくとともに，ボランティア活動に内包する価値や意義について，学生自身が「内的語りかけ」を行うことができるような環境や場の設定，提供を行っていかなくてはならない。

最後に，今後の活動に対する方向性として，今回は，事業計画から実施の段階に至るまでに，時間が少なく，事業担当者にかなりの負担が強いられた。この活動が継続したものとして取り組まれるのであれば，来年度以降，より，充実した計画や内容，プロセス等が期待される。また，参加生徒も，今回は高校生であったが，次回は，特別な支援を要する小・中学生を対象にプログラムが計画されることも期待できよう。

これからも，国立青少年交流の家が持っている人的・物的資源を最大限活用しながら，地域や社会に対して，本取り組みの意義を打ち出していくことの価値は高いと考える。

文　献

１）荒川裕美子・保住芳美・吉田浩子（2006）：小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連，川崎医療福祉学会誌，16，133-139.

２）箱井英寿・高木修（1987）：援助規範意識の性別・年代・および世代間の比較，社会心理学研究，3（1），39-47.

３）濱元一美・池田昭子・中山真理・小西俊子・森　愛（2010）：関西女子短期大学生におけるボランティア活動の動向－地域支援交流センター委員会の活動を通して－，関西女子短期大学紀要，20，11-21.

４）星野晴彦（1996）：ボランティア分析視軸に関する考察－被援助者の生活の質よりの再検討，ノーマライゼーション研究，42-51.

５）岩井雪乃（2010）：ボランティア体験で学生は何を学ぶのか－アフリカと自分をつなげる想像力－，人間環境論集，31，1-11.

６）文部科学省（2002）：「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）」，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/

chukyo0/gijiroku/020702a。htm（2011．1．14データ取得）.
7）文部科学省（2007）:「特別支援教育関係ボランティア活用事例集」, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/012.htm（2011．1．14データ取得）.
8）文部科学省（2008）:「文部科学省におけるボランティア活動の推進について－平成20年度学生ボランティア活動支援・促進の集い－」, www.jasso.go.jp/syugaku_shien/documents/20tudoi_mext.pdf（2011．1．14データ取得）.。
9）文部科学省（2008）:「青少年体験活動総合プラン（拡充）」, http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100105/004/027.htm（2011．1．14データ取得）.
10）宮下孝広・黛　雅子・秋元有子：（2008）：学生ボランティアによる地域の学校と大学との連携の試み（第二次報告），白百合女子大学発達臨床センター紀要，11，11-17.
11）高野進・影山礼子・所澤保孝・細谷早里（2008）：関東学院大学生の奉仕・ボランティア観と実態について－アンケート回答の集計と報告，関東学院大学経済系，第234集，157-173.
12）山川久恵・宮本正一（2000）:不登校児のためのキャンプが参加者に及ぼす効果：PAC 分析による検討，岐阜大学教育学部研究報告，人文科学，49（1），129-142.

（2011．2．18 受稿，2011．3．18 受理）

Experience-based volunteer activities for students in special support schools

Takaaki ISHIYAMA & Kiyohiko YATSUNAMI

The meaning and problems of experience-based volunteer activities for students in special support schools were investigated. The situation at the “School for Exciting Experience in Nature at Aso,” which is a “Project for Promoting Experience-based Activities for Supporting the Upbringing of Young People,” was analyzed from the perspectives of student volunteers, teachers, and parents. The participatory program was conducted with high school students of a special support school in Kumamoto Prefecture. At the request of National Aso Youth House, university students (n=19) were sent as volunteers and they supported empirical activities that involved the students, teachers, and parents. The results demonstrated the following cognitive benefits of the program: “vivid learning experience,” “a sense of meaningfulness” for volunteer students, “development of experience-based activities,” “value of experience” for teachers, and “rediscovery of children,” “time for parents and children,” and “gratitude” for parents. It was concluded that the following were significant in this project: “opportunity,” “connection,” “a sense of meaningfulness,” “conflict” and “sublimation.”

Key words: volunteer experience, special support school, connection, questionnaire survey, KJ method